

[北総文化研究センターから]

## 北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告(その17)

### 第79回研究会

1. 開催日 2017年2月17日(金)
2. 場 所 2号館会議室
3. 題 目 地域福祉を考える－「わろうべの里」を見学して－
4. 報告者 野城 尚代
5. 報告要旨

四街道市の福祉施設として、平成15年秋に開設の「四街道市南部総合福祉センターわろうべの里」(以下「わろうべの里」という)が四街道市和良比にある。四街道駅南口からは約1キロメートル程である。本報告は、2016年12月に2回訪問した時(うち1回は学外授業として実施)に得られた資料や、担当者による説明に基づくものである。

「わろうべの里」は市民参加型の施設づくりとして、市民が自由に参加できるワークショップ(参加者が自由に参加できる協働作業)を通じて設計をした施設である。この施設は「だれでも、いつでも、ひとりでも、子どもからお年寄りまでふらっと立ち寄り、心地よくつかえる場所にしよう。」をコンセプトと

している。「わろうべの里」の名称もワークショップで命名したものである。「わろうべ」には、むかし和良比を「わろうび」と呼んでいたことと「笑うべ」をかけたもので笑顔が絶えないようにとの市民の思いを込めているという。

「わろうべの里」は児童センター、老人福祉センター、地域包括支援センター、ふれあいセンター、福祉ショップ、障害者相談支援事業所という福祉関係の機能の他に、図書館(本のひろば)を有する施設である。このうち、ふれあいセンターは福祉団体やサークルなどの一般も対象としている。平成28年度のサークル活動の定期登録団体は182団体であり、施設内の8室を目的に沿って活用している。図書館は曲線形であり、これはピーナッツの形をデザインしたという。壁はガラス張りであり、外部の景色を見ながら読書することができる。喫茶室は障がい者団体によって運営されている。

児童センターは児童遊戯室、児童工作室、乳幼児プレールームがある。担当者(児童厚生員:児童の遊びを指導する者)によると、工作に力を入れていて、素材は館内にリサイクルコーナーを設けてこれを活用している。

夏休みには、のべ300人が利用した日もあったという。時には、親から子育ての相談を受けることもあるという。

以上のように「わろうべの里」は児童、障がい者、高齢者の福祉に関わる多機能型の福祉施設であり、一般の人もサークル活動、喫茶や図書室の利用として訪問することができる。施設を市民協働で設計したという特徴もあり、そのコンセプトである「だれでも、いつでも・・・」を具現化していることが見学を通して得られた。

「わろうべの里」は、第11回千葉県建築文化賞(平成16年度)を受賞している。

#### 6. 主な質疑・討論

福祉政策の変化を受けて施設の設計がなされたのか、児童厚生員とは何か、施設の維持費はどのくらいかかるのか等という質問をいただいた。報告者が見学後に得た文献等を基に補足するとともに、報告者の今後の研究視点とすることとした。

資料：「四街道市南部総合福祉センターわろうべの里」パンフレットを参照。

※見学にあたり、ご協力、ご説明いただいた担当の皆様にご挨拶申し上げます。

## 第80回研究会

1. 開催日 2017年5月19日(金)
2. 場 所 本学1号館202講義室
3. 題 目 ベトナム企業研究と企業の実態調査に参加して
4. 報告者 前川 邦生
5. 報告要旨

3月19日より3月24日にかけて、ベトナム

企業の実態調査のため、現地訪問をした。

まず3月20日早朝、ホーチミン市・タンソンニャット国際空港着後、両替しマジステック・ホテルに向かいまず、荷物を預けた。

その後、時間調整をして市内から、日系企業イオンを訪問し、昼食後、事前に依頼しておりました、ホーチミン市経済大学の会計学の先生からメールにて2時に大学に訪問するよう連絡を受け、2時少し前に大学へ訪問。

事前に質問事項を立教大学の企業分析専攻教員よりの内容について、約1時間程度ミーティング、会計教育システム、及びカリキュラム体系等の説明を受ける。

特に、簿記・会計学の基礎教育について、1年時にベトナム語(本国の言語)、2年生以降は会計関係科目のすべてについては、英語による講義を進めているとのことでした。

特記すべきは、外資系の企業へ(日系企業も含め)、卒業生を送り込み、就職条件の道を有利にするためだとのことであった。

3月21日 メコンデルタツアー・ジャングルクルーズにおいて、昼食で、メコン川養殖の「エレファントイヤーフイッシュ」の名物から揚げ、フオー、生春巻き等で済ませた。その後、フルーツ園、ハニー園、ココナッツキャラメル工場見学等で1日を過ごした。

3月22日 日系企業サントリー(サントリー51%、ペプシー49%)へ訪問。

ここでは、ファイナンシャル・コントローラから、約2時間程度の会計実践、会計組織、及び北部ハノイ・中部ダナンの売り上げ関係、販売業績等の分布分析等の説明と北部におけるマーケティングのむずかしさ等のお話を伺った。

なぜ、北部の業績が悪いのか等々・・・北

部は、コココーラーが断然突出して支配しており、販売業績が良いので、どのように切り込むか等戦略を組み立てて対応しているとのことをお話などを伺う。

これは、会計実践と経営戦略との関係を分析し、社員（営業・販売店等への指導）への教育と経営戦略の教育に生かしていく対応策を練る等々の戦略展開策等。

3月23日 日系企業のベトナムへの進出に際し、ベトナムの法律、税法、その他、会計指導のAGS (A.I. Global Sun Partners Joint Stock Company) へ訪問。(2008年9月ハノイ本店設立、2009年ホーチミン事務所、2015年ダナン事務所)

ここでは、会計実務の実態等、例えば、国際会計基準等の適用導入状況、日本の会計実務との乖離、等々の説明と共に、国際財務報告基準等々の関係を含め、2時間ほど伺った訪問であった。

特に、学生諸君へは、日本語検定1級(N1)が望ましいが、2級(N2)でも取得し、簿記・会計の基礎を十分学んでいれば、採用していただけるとのことでした。さらに、学生諸君のインターンシップの受け入れは3か月まで可能であるとのことでした。

## 第81回研究会

1. 開催日 2017年6月16日(金)
2. 場所 2号館会議室
3. 題目 やみにつきなる発酵食品ーカンボジア国境域における「パデーク」の受容
4. 報告者 山崎 寿美子

## 5. 報告要旨

報告者は、カンボジアとラオスの国境域に居住するラオ人に関心を持ち、2006年より、人びとの対人関係、言語と食の変容などについて、現地調査を続けている。今回の報告では、当該地域でつくられている淡水魚の塩漬け発酵食品「パデーク」に着目し、それが他の民族にも積極的に受容されている様相について紹介させていただいた。

ラオスと接するカンボジア北東部のストゥントラエン州およびラタナキリ州には、多くのラオ人が居住している。人びとは16世紀頃よりラオス南部からメコン川沿いに南下してきたとされている。漁を生業の一つとし、河川を自由に行き来してきた人びとにとって、そもそも国境の意識はなかった。ところが、19世紀から20世紀にかけてのフランスによる植民地支配、そして独立後のカンボジアの近代国家形成の流れのなかで、国境線が引かれ、当該地域のラオ人はカンボジアの一地方の住民としてくみこまれていった。マジョリティであるクメール人の主導するカンボジア政府が、クメール語での教育、クメール人の移住政策などによってクメール化を推し進めていく過程で、ラオ人は、暴力沙汰も強い主張もおこすことなく適応してきた。現在では、自分たちが何者であるかというアイデンティティが、ますます曖昧になっている。

こうした状況下、「ラオのもの」と意識化されるのが食であり、とりわけ、味の基本となる「パデーク」にはこだわりがみられる。「パデーク」は、淡水魚に塩と米糠を加えて甕などで寝かせてつくられる発酵食品であり、調味料はもとより、おかずとしても、たれとしても食べられる、ラオ人の食生活に不可欠

のものである。長期保存がきくため、食料が他にない時や農繁期の保存食となっているのだが、それだけでなく、「パデーク」は、しばらく口にしていないと無性に食べたくなるような他に代替不可能な食品でもある。またそれは、民族的な他者との間に線引きをする指標となることもある。

さらに興味深いことに、その美味しさのゆえに「パデーク」が、クメール人や少数民族のモン・クメール系の人びとにも、積極的に受容されている。「パデーク」を食べた者はやみつきになるかのように、ラオ人が就業・就職・婚姻などによって「パデーク」を携えて他所に移動する場合や、移住・親族や友人の訪問・その他さまざまな理由でクメール人や少数民族がラオ人と接触する場合に、他の民族にも、好意的に受けとめられたり、積極的に求められたりする。クメール人の間でも、「プロホック」とよばれる類似の発酵食品がつくられているが、敢えて「パデーク」を選択する例が多くみられる。

ただし、「パデーク」にも多様性がある。カンボジア北東部に限らず、メコン川流域にまで視野を広げてみると、生育環境・移動の歴史や民族混交状況・流通・社会勢力の動向など、さまざまな違いから、微妙に中身の異なる「パデーク」がつくられている。また、若者世代のあいだでは「パデーク」離れの傾向もみられる。こうした状況に鑑み、報告者は、「パデーク」それ自体の変容も考慮に入れつつ、現在、地域を広げて調査を行っている。今後は、「パデーク」の受容と変容、それに対する人びとの捉え方についてデータを集めるとともに、このような現象を人類学的にどのように考えられるかという点を課題と

して取りくんでいきたい。

## 6. 主な質疑・討論

報告後、今後の課題にも関連する貴重な質問とアドバイスを諸先生方よりいただいた。

①ラオ人の「パデーク」を、日本人の身近な食品（たとえば味噌・醤油など）におきかえてみると、論点として検討すべき課題がより明確になるのではないか。②日本の納豆のように、発酵食品は食品のなかでもとりわけ嗜好が保守的になる傾向がある。日本をはじめ各地域の発酵食品も参考にするとよい。③食物を美味しいと感じて摂取するのは、社会的な要因よりも、脳の働きが大きい。それゆえ、嗜好は社会関係に左右されにくく保守的であると同時に、美味しいものに反応して変わっていく。④「パデーク」を仕込む際に「タネ」はあるか。（答え：報告者の知る限りで「タネ」はない。毎年、「パデーク」を食べきって、甕を洗って干している。そのため、先代から作ってきた「パデーク」を「タネ」として用いている様子はみられない。）⑤嫁に行く際に味噌床をもっていく、というような現象はあるか。（答え：報告者の知る限り、そうした現象はみられない。「パデーク」の甕は、家についている印象がある。ラオ人は妻方居住が一般的で、家は女性に継承される。女性が夫方に居住するケースでは、小型容器などに移して持っていき、甕は母の家に残される。）⑥甕の形状が「パデーク」と「プロホック」で異なるが、密閉するか否かで、発酵を促す菌が異なるのか。（答え：今後できる限り他分野の研究者のお力を借りながら調べていきたい。）

## 第82回研究会

1. 開催日 2017年10月20日（金）
2. 場所 2号館会議室
3. 題目 アリストテレスのλόγος
4. 報告者 矢後 長純
5. 報告要旨

アリストテレス（BCE384～322）は Nichomachean EthicsのA (Book 1) XIII-10（第13章10）で、人間は栄養や成長などでは他の動物と同じだが、λόγοςを持っている動物であると述べた。アリストテレスはλόγοςという言葉で何を語ったのか？

アリストテレスのλόγοςの用法・用例は多彩を極めたが、現代用語でいえば、general cognitive capacityとmodulesからなる思考情報処理システムを中心とするものであろう。λόγοςの衰退が認知症の主要症状といえるが、要介護度4でλόγοςが相当程度に衰退していると見えても、そのシステム論的構成は依然として精巧であり、部分的には充分なロバスト性を示す。一例を示す。

ある日の午後、特別養護老人ホーム「パストン浅間台」（埼玉県上尾市浅間台）で開かれたロボット・セラピー・セッションの際に、ある高齢認知症婦人がテーブルの端に近づくイヌ型ロボット・アイボ（AIBO、ソニー製ERS-111）をそっと押し戻すのを目撃した。セッション開始からおよそ20分が経過していた。この婦人（介護レベル4）はずっと無言（失語症）であったが、この「とっさの行動」をとった時にも声はあげず、また表情も変えず、なにごともなかったかのように

あった。

この婦人の行動は緊急救助活動であり、「とっさの行動」である。婦人はアイボがテーブルから落下しそうであるという緊急事態を察知（入力情報からの未来予測）し、ついでそこからの回避をノン・ヴァーヴアルで行ったのである。婦人の「とっさの行動」には、アイボが落下するかも知れないという表象が伴っていたことも認めざるを得ない。情報科学的にいえば、その表象が「とっさの行動」の引き金を引いたのである。婦人がアイボに対して「とっさの行動」をとったという点では、表象から末端の筋運動系までも含めて、関連する情報処理機構が衰退も変性もしていないことを示している。「アイボが転ぶことがある。そのとき、転んだアイボを助け起こす認知症の方もいらっしゃる」という報告（東京工芸大学中村龍平教授のグループ）もあった。

しかも、上記施設の介護福祉士の報告によれば、この婦人は食事のときに目を離すと、傍らのティッシュ・ペーパー・ボックスから、ティッシュ・ペーパーを一枚ずつ引っ張り出しては、無言でお味噌汁のお椀の中に入れるという奇矯な行動をとる。

この行動は「とっさの行動」ではなく、「熟慮行動」である。ただしこの行動は、筋運動系も含めて「熟慮行動」情報システムの誤作動によるものと思われる。例えば、大根を千切りにしてお鍋にいれるといった行動であろうか。婦人の行動は表象なき行動、まさに産業用ロボットの作業に近いようにも見えるが、婦人がティッシュ・ペーパーを千切り大根、お椀をお鍋というように誤認していたとすれば、婦人の行動はお味噌汁を用意する

という表象を伴っていたことになり、完全に意味のある行動だったことになる。3歳の幼児のおままごとに似た行動ともいえるが、おままごとでは幼児自身がその虚構性を明確に認識している点が婦人の行動と異なる。この婦人の行動は誤認による表象が「熟慮行動」を起動していたのが原因と解釈することができる。

では、このような認知症の論理の一部破綻現象を前にしてアリストテレスの言明が、どのような意味を持つかを考えてみる。それにはアリストテレスのλόγοςが歴史的にどう扱われたかを見なければならぬ。

アリストテレスのλόγοςは、Modus Ponensに発展した。

$$p \text{ ならば } q \text{ である。 } \quad p \supset q \quad (1)$$

この関係 (material conditional) の両辺の結合記号 horseshoe  $\supset$  は、確実な true antecedent  $p$  から確実な true consequent  $q$  へ、すなわち左辺から右辺への単方向の論理の確実な進行を保証している。この時、

$$p \text{ である。 } \quad p \quad (2)$$

$$\text{故に、} q \text{ である。 } \quad \therefore q \quad (3)$$

この関係式はアリストテレスの後、ストア学派の苦闘によりおよそ500年をかけてAD2世紀ごろに完成された。

しかし、人間や動物の行動では事前になんらかの計算が入るので、20世紀に入ってModus Ponensを発展させた直説条件法 (indicative conditional) の形をとるべきであるとされた。 $p$  と  $q$  は、ことあるごとにダイナミックに創造される。Modus Ponensとは異なる立場を明確にするために horseshoeではなく矢印を用いて表現する。

$$p \rightarrow q \quad (4)$$

$$p \quad (5)$$

$$\therefore q \quad (6)$$

この新しい見解に到達するのに20世紀言語哲学は激論を交わしたと伝えられる。

アリストテレスのλόγοςは、形式は単純だが、その内容は外部環境情報の取得に始まり、思考情報処理過程を経て行動を誘発するシステムであった。アリストテレスにとってλόγοςは、人類の新石器時代以来の思考の最初の総決算でもあった。しかし、システムの萌芽はカンブリア紀の動物たちにも見られる。結局、このシステムの内容はアリストテレスの意に反して、あらゆる動物において行動を誘発するシステムだったのである。

論理の構築を目指したアリストテレスから論理の破綻を主症状とする認知症への道は、依然としてはるかに遠い。それでもわれわれは、システム研究はトップダウンよりもボトムアップのほうがよいとする Rodney Brooks 教授 (お掃除ロボット Roomba の発明者) の方針を受け継がざるを得ないと思われる。アリストテレスは、その第一歩を踏み出していたのである。

## 第83回研究会

1. 開催日 2017年11月24日 (金)
2. 場所 2号館会議室
3. 題目 「企業経営を理解するための Balance Sheet の研究」  
— 取得原価主義から時価評価主義への変遷 —
4. 報告者 木村 清司
5. 報告要旨

企業経営が表現されるのは財務諸表の貸借対照表（Balance Sheet, B/S）と損益計算書（Profit and Loss statement, P/L）である。企業は経営状態の健全性を理解するために、資産・負債・資本の内容をB/Sにて作成する。B/Sは左側に資産、右側に負債と資本を記入する。これは資産・負債＝資本を表現する。つまり資産＝負債＋資本であり、作成される時点によって（期首）と（期末）がある。企業経営の結果である当期純損益は『期末資本－期首資本』で表記される。

企業経営の健全性とは負債の支払手段が存在し支払期日に遅延なく債務を弁済できる財政状態になっていて、継続して経営ができる財務状況を構成していることを意味する。

B/Sの左側は資金の調達状況を右側は資金の運用を表示している。これは3つの企業会計公準（Convention）から成立している。それは企業実体、会計期間、貨幣的評価である。その表記は勘定科目名と貨幣金額で行われ、取引の発生時点の金額で記帳される。これを発生主義会計と言い、資産は購入した時点の金額であり、現在の価値を表現していないのである。これでは企業経営の正確な表現にならないので、期末B/S作成時に時価評価を行う。

時価評価で発生する勘定科目が売掛金に対する「貸倒引当金」、建物や備品の現在価値のために「減価償却費」、有価証券に対する「有価証券評価損」である。現在では保守主義の原則で表記しなかった「有価証券評価益」も国際会計基準の動向で採用している。

B/Sは実際の取引の金額と評価によって発生した評価勘定の金額を合算している。企業経営者はこれを利用して不健全な経営状態を

粉飾して表示する場合がある。また、支払手段である現在の現金と将来の現金になれる勘定科目である流動資産が同等に表記され、実在資金と潜在資金が混同されている。これにより、B/Sの当期純利益は支払い能力が存在しなくても計算される。これが『勘定合って銭足らず』であり、現実には経営状態が不健全でありながら、利益を達成している企業と表記される。これが『黒字倒産』である。

企業経営を理解するためにはB/Sの内容を正確に分析する能力が必要である。この基本的知識では、B/Sは単なる統計表であるという認識を持つことである。そのため、潜在資金の勘定科目の金額が実際は現金化できる能力が何パーセントの確率かを分析する必要があるので、継続的に財務管理を実施する。

B/Sは企業経営を理解する重要なデータであり情報だが、表面的数値を単純に受け止めると企業を倒産させる。

平成不況と呼ばれたバブル崩壊後の銀行ではB/S上の貸出金の中に、回収不能な不良債権を大量に隠し持っていた。一般企業では産業の二重構造から部品を大企業に売り上げて、代金は受取手形で決済する中小企業が多数である。売掛金や受取手形を現金で回収することは大変な時間と努力（費用）を必要とする。

今後、日本の企業経営は大きな新しいB/S問題を抱えることになる。実体のない支払い手段である『仮想通貨』が取引されることで、不可視な情報資産を評価し処理する必要がでてくるからである。